

文化財センター通信  
【かざぐるま】

# 風車

第 28 号

平成18年10月30日発行



紀州の歴史と文化の風

財団法人 和歌山県文化財センター

## 旧吉備中学校校庭遺跡 第二次発掘調査終了!!

今年五月下旬に始まった旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査（文化財センター実施分）が八月三十一日をもって終了しました。なお、有田川町遺跡調査会による発掘調査は現在も実施中です。

昨年度の一次調査と合わせて約六千㎡を調査し、弥生時代、奈良時代、鎌倉時代に生活が営まれた遺跡であることがわかりました。

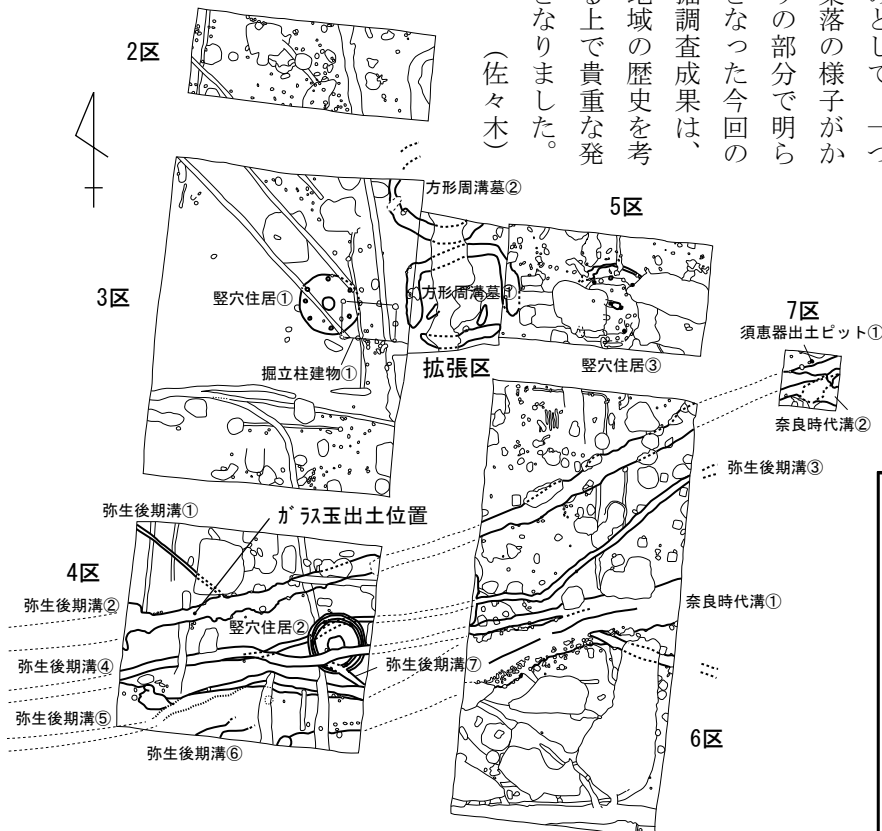
本号では、調査概要に加え、現地説明会や講演会など、一般の方々に向けて行った活動について報告します。

### 調査概要

二次調査では、弥生時代中期の竪穴住居一棟、後期の竪穴住居二棟、方形周溝墓二基、溝七条、奈良時代の溝二条、鎌倉時代の溝や土坑など多数の遺構の存在が明らかになりました。これらの内容については、七月実施の現地公開資料、八月実施の現地説明会資料（当センターHPで

もご覧いただけます）に記載してありますのでここでは省略しますが、規模がわかるものとしては県内初となる弥生時代後期の方形周溝墓をはじめとして、一つの集落の様子がかなりの部分で明らかとなった今回の発掘調査成果は、当地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

（佐々木）

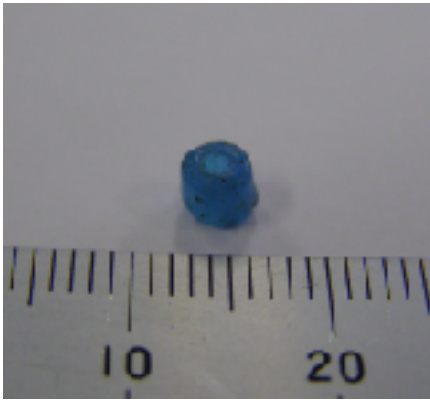


2次調査遺構平面図 (S=1/800)

- 第28号の主な内容 —
1. 旧吉備中学校校庭遺跡
    - ・ 2次調査の概要
    - ・ ガラス玉について
    - ・ 1次調査出土の鉄鏃について
    - ・ 現地説明会、講演会など
  2. 催し物のご案内
    - ・ 秋季企画展「平安京と紀伊」
    - ・ シンポジウム「高田土居」など

## 弥生時代のガラス小玉

旧吉備中学校校庭遺跡の第二次調査で、青いガラス小玉（左写真）が出土しました。



ガラス小玉写真

見つかった透明の青いガラス小玉の大きさは直径約4ミリと非常に小さなものです。首飾りなどを作るビーズをイメージするとわかりやすいかと思えます。今回出土したガラス小玉は1点だけで、弥生時代の溝の跡から出土しました（1ページ遺構平面図）。長年土の中に埋まっていたこともあり、すこし傷んではいますが、当時の鮮やかさを色濃くとどめています。

日本における古代ガラスは、正倉院の宝物のひとつであるガラス製品などが有名ですが、その登場は古く

は弥生時代、今から約2千年前に遡ります。もつとも、ガラスという素材の起源は今から約9千年前のメソポタミア地方に遡るとされています。

ひとくちに『ガラス』といってもさまざまな種類があります（左図分類図）。それぞれ、主に使用された時期は少しずつ異なりますが、古代より豊富な種類があったことがわかります。

今回見つかったガラス小玉を分析した結果、カリウムを多く含むカリガラスであることがわかりました（下図分析結果平均値）。カリガラスは、弥生時代から古墳時代にかけて利用されており、小玉をはじめ丸玉、管玉、勾玉などさまざまな製品が作られました。

今回見つかったガラス小玉もそのひとつだと考えられます。また観察の結果、このガラス小玉はガラスの管を引き伸ばす引き伸ばし技法の後、輪切り状に切つて

いく管切技法によって作られていることがわかりました。このような集落跡から、ガラス玉などのガラス製品が少しだけ出土する例は少なくありません。当時、ガラス製品は非常に貴重なものであったと考えられます。

その集落にあった宝物、あるいはお守り的な役割を持っていたのかもしれない。（北森さやか）

分析結果平均値

成分	珪素 (SiO <sub>2</sub> )	アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	カリウム (K <sub>2</sub> O)	鉄 (FeO)	銅 (CuO)
化合物濃度 (%)	71.89	17.06	7.89	1.74	0.23	1.20

## ～古代ガラスの種類～

### アルカリ珪酸塩ガラス

- カリガラス
- カリ石灰ガラス
- ソーダ石灰ガラス
- 高アルミナ含有ソーダ石灰ガラス
- 混合アルカリガラス

### 鉛珪酸塩ガラス

- 鉛ガラス
- 鉛バリウムガラス

### 鉛アルカリ珪酸塩ガラス

- カリウム鉛ガラス

**第3回 歩いて知る紀の国歴史探訪**  
「大庄屋旧中筋家住宅と和佐の歴史遺産」開催!

平成十八年十一月二十五日（土）

午後一時より、（社）和歌山県文化財研究会と共催で、見学会を行います。現在保存修理中の重要文化財旧中筋家住宅は、主屋が完成間近となりました。仮設足場から建物をじっくりと見ることが出来る最後の機会です。中筋家の位置する和佐地区は、熊野古道が貫いており、旧中筋家のみならず、文化財や歴史遺産の多いところです。

今回、旧中筋家住宅と周辺の歴史遺産を約二時間歩いてまいります。貴重な機会をお見逃しなく。

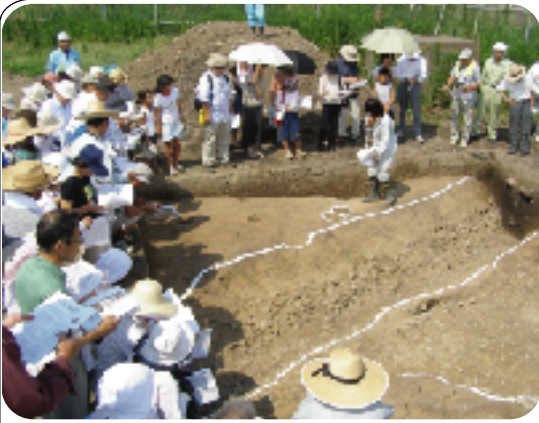
- 集合場所 旧中筋家住宅  
修理工事事務所前 13:00  
(JR千旦駅 南へ徒歩15分)
- 申込・定員 往復葉書で下記へ申し込み  
定員20名（申込先着順）
- 資料代 300円（研究会会員200円）
- 申し込み・問い合わせ先  
重要文化財旧中筋家住宅修理工事事務所  
担当：御船  
〒649-6324和歌山市榎直148番地  
Tel. 073-477-5969

現地公開・現地説明会  
親子発掘体験

前半部で調査した2〜4区について七月四日に現地公開、後半部の5〜7区については、八月二十六日に現地説明会を開催しました。

また、藤並小学校、田殿小学校の6年生を対象に現地説明会を開催したほか、八月十一日には有田川町内の6年生を対象に、親子発掘体験を行いました。

実際に遺跡や土器を間近に見てもらって、発掘調査とはどんなものか、少しでも多くの方に知っていただければと思います。(佐々木)



現地説明会風景

講演会「弥生時代の終焉―旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査報告会―」

9月23日有田川町の「きびドーム」において、有田川町教育委員会と共催で、当地域の弥生時代後期をテーマとした講演会を行い、約80名もの方々にお越しいただきました。

和歌山県教育センター学びの丘所長吉松敏隆氏から「有田地方の地形」、県教育委員会文化遺産課長藤井保夫氏から「遺跡があるわけ」、奈良女子大学講師坪之内徹氏から「弥生から古墳社会への変革」と題したご講演をいただき、当センター佐々木から調査成果を報告しました。



出土遺物展示風景



報告会の会場風景

吉松講師は、吉備平野の形成過程など地質的な観点から当遺跡を位置づけられ、藤井講師は、旧石器時代から中世に至る遺跡の変遷の中で弥生時代の遺跡がどのように展開するかについて述べられました。坪之内講師は、紀伊における古墳時代への変化の特質を青銅器の埋納や土器の様相をもとに述べられました。それぞれの視点からテーマにせまる講演によって、この遺跡に対する理解をより深めていただけたのではないかと思います。(佐々木)

平成十八年度秋季企画展

「平安京と紀伊」

「平安時代から室町時代の土器」

今回の展示は、近年発掘調査の行われた有田川町野田地区遺跡で多数出土した、平安時代から室町時代にかけての土器を中心に、各地域、各時期ごとにその形態や製作技法などを比較していきます。

都市である平安京と地方にあたる紀伊の土器の違いを明らかにするとともに、紀伊における北と南、東と西の土器の違いにも焦点を当てています。いにしえの人々が日常生活していた土器とはどのような物であったのか、また、土器の違いが何に起因するのかについても併せて考えていきます。

展示は、実際に近くで見、感じていただけるオープン展示です。展示会に併せて、文化財講座・展示解説も行います。お楽しみに。(渋谷)

期間 平成十八年十月三十日から  
十二月二十二日まで  
会場 きのくに歴史探訪館  
(当センター調査事務所)



## ～旧吉備中学校校庭遺跡出土の鉄鏃（鉄製の矢じり）～



昨年度実施した一次調査で出土した鉄鏃(写真)について紹介します。鉄という金属が日本で出土するようになるのは、大陸の文化が活発に入ってくるようになる弥生時代になってからです。近畿地方でその出土がある程度の量見られるようになるのは弥生時代中期後半(2千年位前)以降で、製品ごととその時期は若干異なりますが、石器と入れ替わるように増加すると考えられています。しかし分解して残らなかったり、再加工されたりする性質を持つため、出土数は限られているのが現状です。このような弥生時代の鉄製品の中で鉄鏃は、比較的多く出土する製品ではありますが、数少ない例の一つであることに違いはありません。

今回鉄鏃は、弥生時代後期後半の方形堅穴住居から出土しました。この時期の鉄鏃には様々な形が認められますが、今回出土した鉄鏃は、柳葉式やなぎばしきという形態に属し、下端の細くなっている部分(茎)なかごは途中で折れていました。最大幅約2cm、茎を除く長さは5cm弱です。和歌山県内での弥生時代の出土例は少なく、和歌山市田屋遺跡たや・西田井遺跡で柳葉式の可能性がある鉄鏃が出土している他は、御坊市中村II遺跡、紀の川市東田中神社遺跡、かつらぎ町船岡山遺跡ふなおかやまなどで他の形態が少数認められるのみです。時期はいずれも後期に属します。柳葉式は、近畿よりも九州や中四国地方で多く見られる形態とされていますが、出土例が少ない現在、和歌山県における鉄鏃の特徴を考えるにはまだ不十分な状況です。しかし、形態や製作技法などを他地域と個別に比較していくことにより明らかになることも多くあると考えています。

(佐々木)

## シンポジウム 高田土居 —室町時代の守護拠点から铸造工房へ—

日時 平成18年11月25日(土曜日) 13時～16時40分 主催 財団法人 和歌山県文化財センター  
 場所 みなべ町生涯学習センター みなべ町教育委員会  
 内容 (みなべ町谷口301番地4 電話 0739-74-3134)  
 13:00～13:10 開会挨拶 松田長次郎 (財)和歌山県文化財センター専務理事  
 13:10～13:50 「高田土居城跡の発掘調査成果について」川崎雅史 (財)和歌山県文化財センター技師  
 13:50～14:30 「守護拠点としての高田土居城」弓倉弘年 和歌山県立高等学校教諭  
 14:30～14:40 休憩  
 14:40～15:20 「中世集落論と高田土居城」坪ノ内徹 奈良女子大学文学部講師  
 15:20～16:00 「高田土居と铸造遺跡」五十川伸矢 京都橘大学文学部教授  
 16:00～16:30 講演者討論  
 16:30～16:40 閉会挨拶 荒堀清隆 みなべ町教育委員会教育長

### 風車 第28号

平成18年10月30日 発行  
 (財)和歌山県文化財センター  
 〒640-8404  
 和歌山市湊571-1  
 Tel: 073 (433) 3843  
 Fax: 073 (425) 4595

e-mail: maizou-1@wabunse.or.jp  
 URL http://www.wabunse.or.jp

《編集後記》 10月から和歌山城跡、粉河寺遺跡の発掘調査が始まりました。進捗状況をホームページに掲載していきますので是非ご覧ください。(佐々木)

